

【 成果速報 】

「とちあいか」の遮光処理が収量・品質に及ぼす影響

【背景】

いちご「とちあいか」においては、これまでの品種と同様、暖候期の高温による果実品質の低下が課題となっています。高温を防ぐ昇温対策としては、一般的に遮光処理が行われていますが、遮光処理は、生育停滞や軟弱徒長、収量・食味の低下を招く心配があります。

そこで、暖候期における遮光処理が、収量や品質に及ぼす影響を明らかにするため試験を行いました。

【結果】

今回は、暖候期対策を目的とし、特に光合成の低下防止を意識し、9月20日～10月2日および3月4日～5月31日の**11時～15時30分**の時間帯に日射量**0.6kW/m²**以上の場合のみ**遮光率70%**の資材で遮光を行いました。栽培方式は養液栽培で行いました。

その結果、遮光区の気温は日中最大で2～3℃低く（図1）、地温は8～9℃低く、また、葉面の最高温度（サーモグラフ画像で確認）は、約10℃低くなりました（データ省略）。

遮光区においては、**無処理に比べ収穫期間を通じて収量が安定しており（図2）、可販果収量は遮光区が11%多く（データ省略）、11月から5月おける10a当たりの販売金額は、遮光区が約20万円多くなりました（試算値）。**

障害果については、**遮光区では先つまり果や先白果の割合が低く、遮光により発生が抑制されることが示唆されました（データ省略）。**一方、**硬度、糖度の低下は見られず（データ省略）、遮光率70%程度の資材でも強光時のみの展張であれば果実品質への影響は少ないと考えられました。**

以上の結果から、光合成の低下防止を意識した遮光をすることで、**生育・収量に及ぼす負の影響が抑制され、安定収量確保につながる**と考えられました。

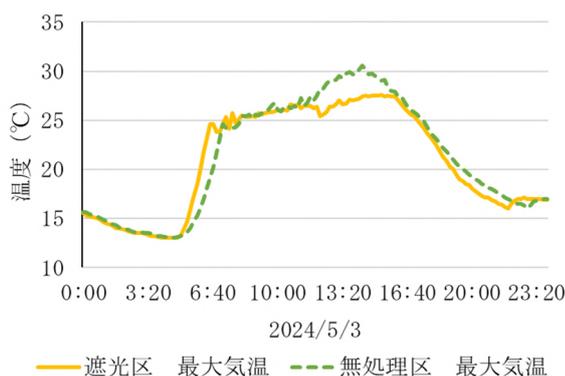


図1 遮光の有無による施設内気温推移

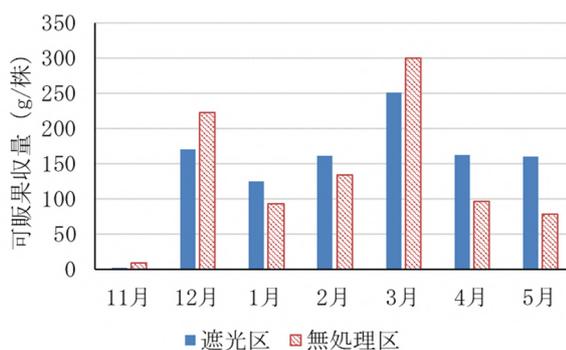


図2 可販果収量 (7g以上)

【今後の試験内容】

遮光処理による障害果の減少や試験の再現性を検証するため、今年度はハウスを入れ替えて試験を行っています。

(いちご研究所 船田 実希)